未来創造科

山口　智也　　小野里　健太　　高山　慶介　　生方　佑樹

主題「社会と関わり合いながら探究し、『実現したい未来』を創造する生徒」の育成

1　主題設定の理由

本校では、総合的な学習の時間を未来創造科として改編して学習を進めている。各学年の単元を、第１学年「群馬を知る」、第２学年「日本を探る」、第３学年「未来を創る」と設定し、第１学年と第２学年では、群馬や日本を対象に探究を行い、第３学年では、探究の対象を限定せず、これまでの探究を踏まえて、探究の方向性や「実現したい未来」の創造に向けたテーマを個々で設定できるようにしている。また、各学年で小単元①「過去を知る」、小単元②「現在を変える」、小単元③「未来に向かう」（第３学年は「未来を創る、未来へつなぐ」）　としている（図１）。

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
未来創造科第３学年	小単元①「過去を知る」、②「現在を変える」、③「未来を創る」「未来へつなぐ」											
	①過去を知る			②現在を変える				③未来を創る		③未来へつなぐ		
	現代の課題には、どんな原因があり、どんな取組がされているのだろうか。	異学年交流		現在をよりよくするために、私たちには何ができるだろうか。 *課題の設定から情報の収集まで	中間検討会	夏休みの実践	夏休み実践の整理・分析	夢や希望溢れる未来を創るために、どんな提案ができるだろうか。	未来創造科シンポジウム	卒業論文制作		

＜図１　未来創造科　第３学年の年間予定＞

昨年度は、現代的な諸課題の解決と「自己の生き方」を踏まえた目的意識のある探究を、「未来創造科クロス MAP」を活用して各教科等と関連付けたり、学びを振り返ったりしながら行うことで、教科等横断的な視点に立った資質・能力を育成できると考え実践を行った。教科等横断的な視点に立った資質・能力は学習指導要領総則にて、以下のように大別されている。

１．教科の枠組みを踏まえた資質・能力
２．学習の基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力）
３．現代的な諸課題に対応する資質・能力

成果として、「未来創造科クロス MAP」を活用しながら道徳科での学びを振り返ることで、未来創造科が各教科等の学習を通して培った多くの資質・能力を発揮する場となり、「実現したい未来」に向けて「自己の生き方」を踏まえた目的意識のある探究が実現された。しかし、令和６年度に行ったアンケートでは「自分で国や社会を変えられると思いますか。」について「はい」と回答した生徒が約 20％と少なく、自分の提案で国や社会に影響を与えることができるということを実感できていないことが課題となった。

未来創造科を通して、自分の提案で国や社会に影響を与えることができることを実感できていないことの原因は、社会とつながりをもちながら、外部人材をはじめとした多様な他者と協働して探究を進めることが十分にできていないからと考える。また、未来創造科の探究の対象としている現代的な諸課題を深く理解することで、社会で起こっている現代的な諸課題をより自分事化することができ、課題意識をもちながら探究をすすめることができると考えた。社会とつながりをもちながら現代的な諸課題を深く理解するためには、多様な他者から得られた探究に対してのフィードバックを聴き、社会とつながる必要がある。

以上のことから、今年度は研究主題を「社会と関わり合いながら探究し、『実現したい未来』を創造する生徒」の育成とし、探究的な学びを実現するための具体的な手立てを通して実践研究を進める。

2　生徒がエージェンシーを発揮し、探究的な学びをデザインするための具体的な手立て

（1）社会とのつながりの中で探究をする地域ネットワークの活用

未来創造科では、身に付けていきたい力として３つの力「学びを統合し、現在を見つめる力」「探究し続け、未来を問う力」「自己を見つめ、未来を切り拓く力」を設定している。特に、「探究し続け、未来を問う力」を身に付けていくためには、地域の人々をはじめとした多くの人々との協力が必要である。地域に関わる人の実際に触れることで得られる新たな気付きから探究を始めていくことが、自分自身で問いをもち探究し続けることにつながると考えられる。そこで、「課題の設定」の際に１年生では「公民館」、２年生では「市役所」や「県庁」、３年生では「群馬大学」と連携し、講話を聞き、自分の興味のあることや疑問に思っていることを質問することで、実際の社会での出来事や問題を自分事として受け止めながら、「探究し続け、未来を問う力」を高めていく（図２）。

＜図２　未来創造科ネットワークモデル＞

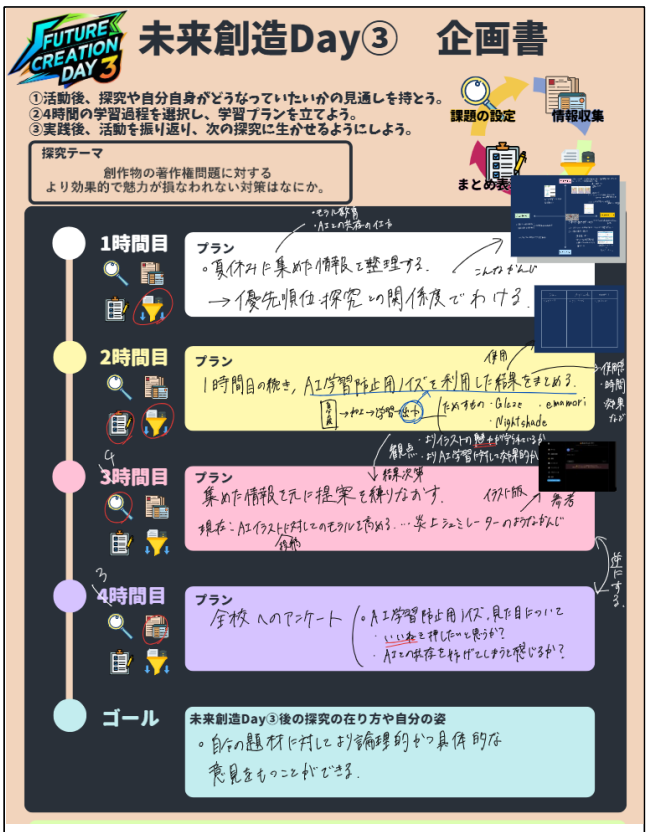
社会との関わりの中で探究することは、「自分で行動に移すこと」にもつながる。加藤（2023）は、「総合的な学習の時間で様々な勤労者との関わりを通して感じ取る勤労者の喜びや苦労、町づくりや地域活性化に取り組む人々と協働して得られる充実感や達成感などは、単なる感情ではなく、極めて知的な理解を含んだ情動と解釈することができる。」と述べている。また、生涯を通じた学習において、全米科学・工学・医学アカデミーは、フォーマルな学校教育の外側にある家族やコミュニティといった文脈の中で人々が育む豊かな知識や能力の重要性を改めて述べており、学校教育の外側にあるコミュニティこそ豊かな資質・能力を育む上で重要であると考えられる。そのため、自身の探究のテーマや興味・関心に照らし合わせ、社会とつながりながら探究を進めることで、現代的な諸課題の解決に向けての資質・能力を高めることにつながると考える。

（2）生徒が自らの探究的な学びをデザインする「未来創造 Day」と各教科等の学びをつなぐ「未来創造科クロス MAP」の活用

未来創造科の探究を行う「未来創造 Day」を設定し、自らの探究をデザインしながら、探究を深められるようにしていく（図３）。探究をスタートする際の課題設定の場面で「未来創造 Day①」を行い、未来創造科ガイダンスを基にしながら、先行研究や社会の様々な取組を調べたり、実際に現代的な諸課題の解決に向けて取り組んでいる企業や団体にインタビューをしたりして、現代的な諸課題についての理解を深めていく。「未来創造 Day②」では、各学年の単元に応じて、外部の「ヒト・

＜図３　未来創造 Day について＞

コト・モノ」に触れ、社会とつながりながら自身の探究テーマを設定していく。また、社会を変えられると考える生徒を増やしていくためには、自分で実現したい未来に向けて、行動を起こす経験が必要であると考えた。そこで、情報の収集や提案の計画を立案する際に、「未来創造 Day③」を位置付けた。「未来創造 Day③」では、半日の時間を設け、実現したい未来と今の自分の探究とのギャップを見つめ直す時間とし、自分の探究の方向目標を決めた。それを意識しながら、「未来創造 Day③」に臨むことで、生徒は「この半日の時間をどう使うか」「何から始めて、どこまで進めるか」などを自分で決める必要が出てくる。さらに、1時間単位では、探究のサイクルが分断されがちだが、まとまった時間を設けることで、探究のサイクルをつなげて経験することができ、よりよい探究をデザインしていくための計画・構想力の向上につながると考え、何をすべきかを計画を立てる企画書を作成し、見通しをもちながら、自らの探究をデザインするようにした（図４）。探究に対して自分で「やってみたい」と思ったことを行動に移したり、計画・立案したことを実践したり、これまでの探究を振り返り、実現したい未来に向けて、自分には何が必要かを検討したりすることをそれぞれが選択しながら行動に移す経験をしていくことで、「自分でもできる」とモチベーションを高め、生徒がエージェンシーを発揮しながら探究を行うことができるようにする。「未来創造 Day③」を実践していくことで、「探究し続け、未来を問う力」の向上につながると考える。これらの「未来創造 Day」の取組から得られたフィードバックについても、個人のみならず講座内で共有することを探究の過程に位置付ける。対象への関わりを増やしながら個々のテーマに粘り強く取り組むことで、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力をより向上していくことにもつなげることができると考える。



＜図４　未来創造 Day③企画書＞

また、各教科等の授業からだけでは得ることのできない知識に触れ、探究の実践や提案のできる機会を増やしていく。情報の収集を通して得られた新たな知識については、「未来創造科クロス MAP」に蓄積しておくようにする。「未来創造科クロス MAP」の活用を軸としながら本校で育成している教科等横断的な視点に立った資質・能力と併せて、未来創造科で「自分で行動に移すこと」によって社会との関わりの中で得られる知的な側面をより充実させていくことで、「学びを統合し、現在を見つめる力」を身に付けていくことができると考えられる。

（３）生徒がエージェンシーを発揮する探究成果発信の場の充実

昨年度は、未来創造科の探究の成果を、12 月に行っている「未来創造科シンポジウム」（３年生）や２月に行っている「未来創造科ミニシンポジウム」（１・２年生）を中心として発信してきた。

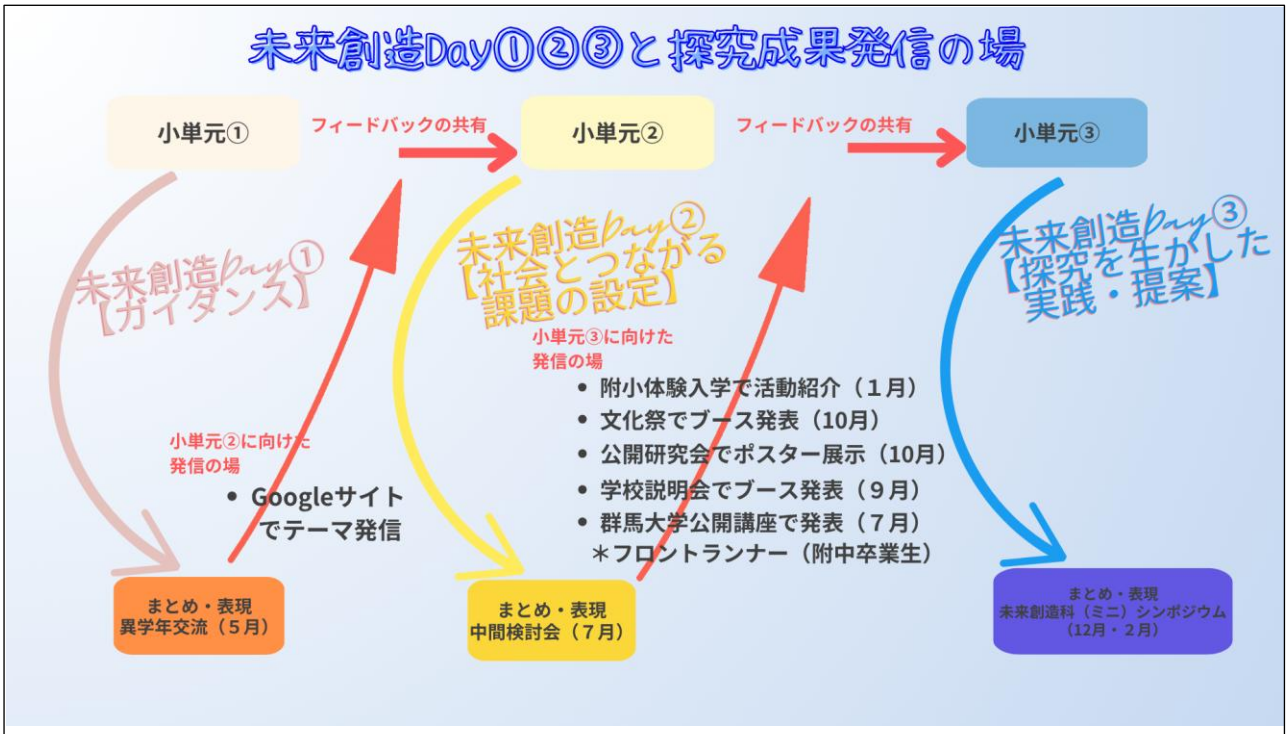
今年度は、年間を通じて校外の外部人材や教員といった多様な他者にも探究の成果を発信していくことで、得られたフィードバックを基に自分自身で探究の成果や課題をより明確なものとしながら、学びを深め、次の探究につなげていくことができると考えた。未来創造科では、自分の探究したいことに合わせて領域を選択し、①環境、防災、エネルギー、②経済、社会、情報、③健康、福祉、④伝統・文化、教育の４つのうちいずれかの講座に所属する。「課題の設定」や「情報の収集」の際に得られた成果を講座内で共有できるようにすることで、探究を通して自分自身の「実現したい未来」を創造していく意欲

を高め、未来創造科でエージェンシーを発揮していく。

具体的には、自身のプレゼンテーションを作成し、考えを伝えるだけでなく、他者が探究に対してどのようなフィードバックを受けたか共有していくことで、自身の探究について振り返るきっかけとしていく（図５）。

探究成果発信の場を充実させながら、得られたフィードバックを個人のみならず講座内で共有することを探究の過程に位置付け、外部とのつながりをより一層意識できるようにし、生徒がエージェンシーを発揮しながら探究を行うことができるようにする。

探究成果発信の場の一つである群馬大学との連携では、本校の卒業生を、未来創造科の探究を生かしながら高校でどのような探究につなげているかフロントランナーとして発表してもらう。卒業生の発表を聞き、それを生徒たちと共有し、探究のゴールを高等学校よりも更に先の未来へと意識付けることができるようにすることで、「実現したい未来を創りたい」という希望をもつことができるようにする。また、「学校説明会」や「文化祭」をはじめとした学校行事では、来校者のいる場面で探究について発信していくことで、よりよい提案に改善していきながら、「実現したい未来」に対して探究する意欲を高めることができるようにする。



＜図５　探究成果発信の場と「未来創造 Day」＞

３　研究の成果と課題

（１）社会とのつながりの中で探究をする地域ネットワークの活用

成果として、生徒は、「ニュースで見るような問題が、自分たちの身の周りでも起こっているんだと感じた。その解決に向けて、公民館の人たちがいろいろな取組をしていることを知った。ニュースで聞くような話は、決して他人ごとではないんだと思った。自分たちにもできることがあり、それを実践していくことが大切なのではないかと感じた」という感想を述べていた。これは、自分たちの地域や県、国や世界には、どんな課題があり、それに対してどんな取組が行われ、どのような成果が得られたかについて話を聞くことで、社会での出来事や問題を自分事として受け止めながら、自らの探究を進める姿が見られた。現代的な諸課題と向き合い、行動に移している人からの話は、実現したい未来に向けて自分が「したいこと」や「しなければいけないこと」を改めて考えるきっかけとなり、探究の小単元でのテーマを見直し、テーマの再設定をする姿が見られた。中学生では経験することが難しいことも疑似体験

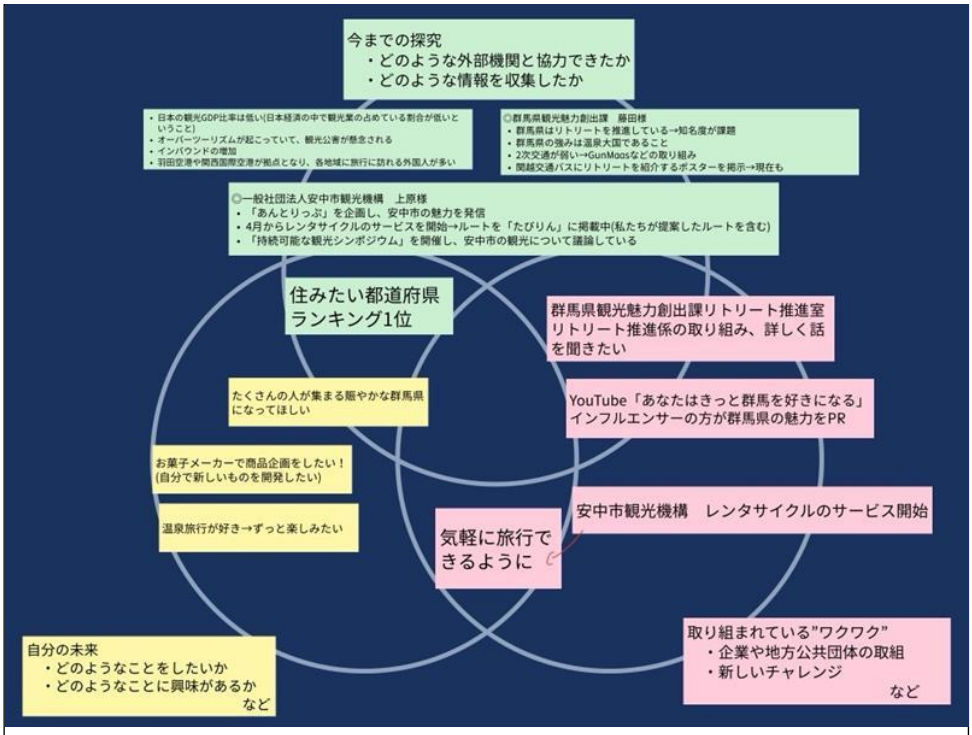
として経験することができ、生徒がエージェンシーを発揮しながら探究に向かうことができた。自らのテーマに粘り強く取り組む姿が多く見られ、「探究し続け、未来を問う力」を高めることにつながったと考えられる。多様な他者と関わる中で、様々な生き方や考え方に触れ、自分の生き方について見つめ直すことにもつながった。

また、インタビューやアンケートで関わりをもった外部の方と何度もやり取りを重ね、自らが考えた提案についてアドバイスをもらいながら探究を進めることもできた。自身の探究を一緒に考えてもらう一人では解決できない問題も他者の協力を得ることで、解決に向かっていったり、よりよい方向へ進めたりすることができるという実感につながった。

＜図６　公民館訪問の様子＞

（２）生徒が自らの探究的な学びをデザインする「未来創造 Day」と各教科等の学びをつなぐ「未来創造科クロス MAP」の活用

「未来創造Day」を設定したことで、生徒自ら、探究的な学びをデザインし、エージェンシーを発揮しながら探究を進めることができた。



＜図７　未来創造 Day①のワークシートのベン図＞

「未来創造Day①」では、企業の取組や先行研究を紹介することで、現代的な諸課題に対して、どのような取組が行われてきたのかやそれによりどんな変化があったのかなどを理解したり、もっと調べてみようという意欲の向上につながったりした。また、「自分が探究したいこと」と「解決しなければいけないこと」の両方を大切にしながら自らの探究のテーマを設定していった。それらを整理するために、生徒は、各教科等で学んできたことを生かして、シンキングツールのベン図を用いてまとめる生徒が多かった。ベン図を用いることで、テーマの設定に向けて大切にするべき自分の興味と現代的な諸課題の両方を意識しながらテーマを設定することができた（図７）。

「未来創造 Day②」では、課題の設定の場面で、１年生は公民館、２年生は市役所と県庁、３年生は群馬大学の各学部と連携した。生徒は、「探究を進めていく中で、これまでは考えたことがなかった方法や発想、出会えなかった知識に触れることができた。」などの感想があり、自身の探究を深めることにつながったと考える。観光について探究をしている生徒は、サイクルツーリズムの提案を考えていたが、群馬大学の先生から「自動運転」、「スローモビリティー」についての講義を受け、それらを提案に加え

られないかと探究をしていた。

「未来創造 Day③」では、生徒は、実際に未来創造 Day③を行う前に、企画書を作成したが、その企画書を練っていく中で、実現したい未来に向けて、改めて、「なぜこのテーマで探究をしてるのか」「何のためにこの提案を考えたのか」など、探究の目的を振り返るきっかけとなり、実現したい未来を実現していくために自分に必要なことは何かを考え直す時間となった。目的意識をもちながら「未来創造 Day③」に向けて何を行うかを考えていくことで、「未来創造 Day③」が終わったら後、何をするかまで見通しをもつことができるようにもなっていた。まとまった時間の中で、探究のサイクルをつなげて経験することで、よりよい探究をデザインしていくための計画・構想力の向上につながった。実際の「未来創造 Day③」では、様々な商店街を比較し、前橋のよさや前橋がよりよくなるための提案を考えるために商店街に行き、街頭インタビューを行ったり、自らが考えた再生エネルギーを広めていくための提案を専門家に聞いていただき、アドバイスをもらったりする活動が見られた。また、実際に校外に出なかった生徒もオンラインを用いてインタビューを実施したり、校内で異学年での交流を通して探究のすすめ方について意見交換をしたり、これまで集めた情報を整理したりする姿が見られた（図８）。生徒は、「こういう実践ができたらいいなと思っていたことに実際に取り組むことができてよかった」や「計画を立てたり、企業に連絡したりする準備の中で、探究を見つめ直す機会になったし、実際に企業に訪問してみて、いろいろ話を聞くことができたことで、自分の探究の目指すべき方向がより具体的になってよかった」、「探究を続けていく中で、集めた情報の整理・分析をどのようにすればよいのか悩んでいたけど、先輩にいろいろとアドバイスをもらうことができてよかった。今後に生かしていきたい」などのような感想があった（図９）。自分で「やってみたい」と思ったことを行動に移す機会が増えたり、自らの探究をデザインし、計画・立案したことを実践したりする場があることで、よりよい探究をしていくための計画・構想力の向上につながったと考える。

校外で探究している様子

校内で異学年交流している様子

オンラインでインタビューしている様子

＜図８　未来創造 Day③の様子＞

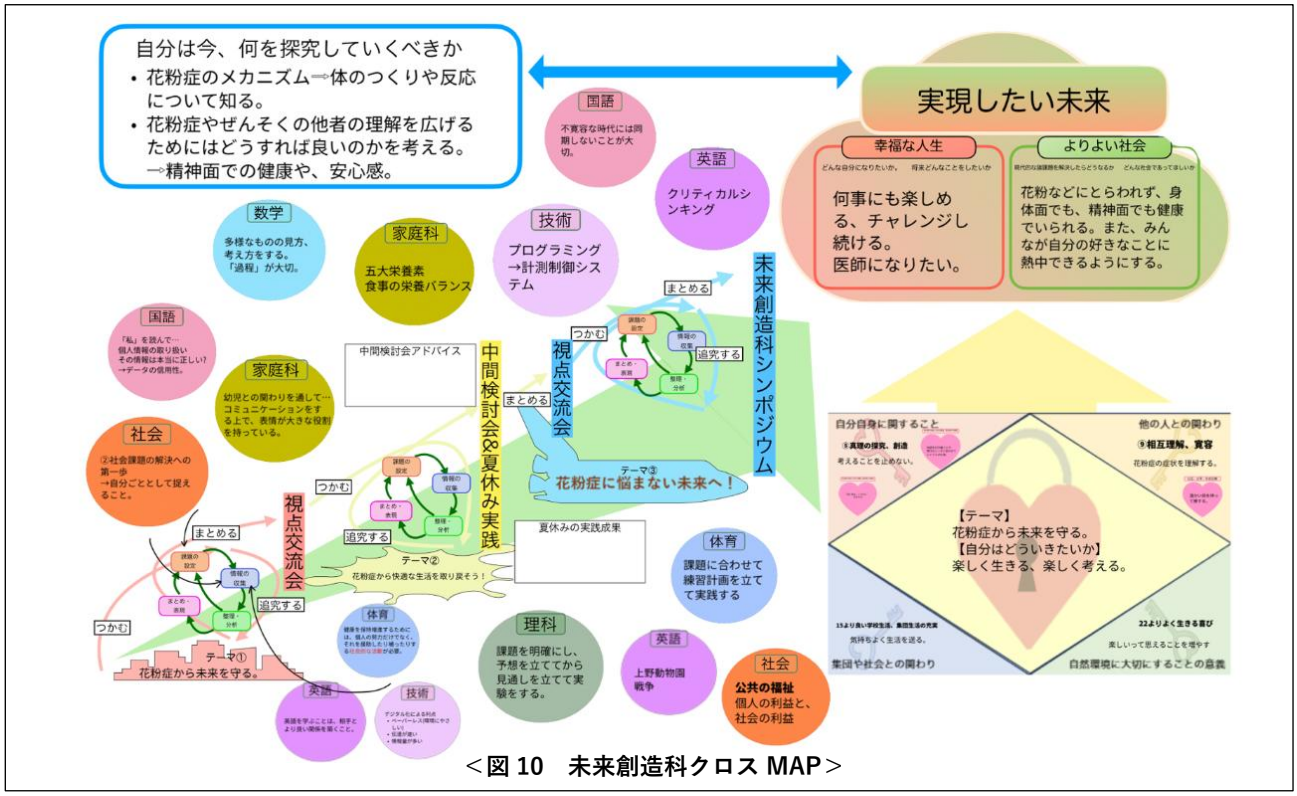
振り返り（未来創造Day③の学びを今後の探究にどう生かすか）

実際にオンラインで大学の先生にインタビューをすることができてよかった。今の提案では、まだ客観的なデータがないため根拠が弱かったり、誰への提案をなのかがはっきりしていなかったりするという専門家からのアドバイスを受けて、自分の提案の改善点を知ることができた。今後も協力をしてくださるとお話をいただいたので、提案を形にして、もう一度プレゼンしたいと思った。

＜図９　ワークシートの記述＞

また、社会とのつながりを大切にしながら、探究を進めることで、「アレルギー反応のメカニズムはどうなっているのか」「伝統文化財の修復は、どのように行われているのか」のように現代的な諸課題の要

因やそれに対して社会の人々が取り組んでいる方法など、各教科等の授業だけでは得ることができない知識に触れることができた。それらの知識を「未来創造科クロス MAP」を使いながら各教科等の学びと結びつけることで、未来創造科で学んだことが各教科等の学びに生かすことにつながり、各教科等でもエージェンシーを発揮しながら学びに向かう生徒の姿が多く見られた（図 10）。



＜図 10　未来創造科クロス MAP＞

（3）生徒がエージェンシーを発揮する探究成果発信の場の充実

成果として、発信の場を充実させることで、多くのフィードバックを受けることができ、自身の探究を振り返り、修正し、実現したい未来へと進んでいくことができた。フィードバックの中には、生徒が考えた提案への称賛もあれば、新たな視点や改善点についての指摘もあった。称賛されることで、自分の探究に自信をもつことができ、「実現したい未来を創りたい」という思いや行動につながった。また、群馬県を地震に強い県にしたいと考えていたグループがあったが、自身の探究で得た提案をしてみたところ、「なぜ地震に強い県にしたいのか」「長年群馬に住んでいるが、地震よりも雹や洪水の方が怖い」「群馬県か農業がさかんだから、雹や洪水が起こると、かなり影響を受けるんだよ」など、課題の設定理由の根拠や相手意識など、新たな視点や改善点の指摘は、生徒同士だけの意見交換では得られなかった様々な視点や立場からの意見となり、探究成果としての提案が多面的・多角的に考えらえたものになった。提案をより説得力のあるものにすることにつながった（図 11）。また、自分が得たフィードバックやそこから学んだことを共有する時間を設けることで、一人や 1 グループの学びが個人に留まらず、領域内、講座内へと広げることができた。発信の場を多く設け、多様な他者とつながりながら探究を進めることは、生徒が外部とつながろうとする意識を向上させ、一人ではできないことも多様な他者と協働しながら実現したい未来に探究を進めることにつながった。これは現代的な諸課題に対応する資質・能力の向上つながったと考えられる。

＜図 11　地域で発表している様子＞

さらに、フロントランナーによる発表を見ることで、今、行っている探究がこれからの自分の人生にどうつながっていくのかのイメージもつことができたと考える（図 12)。

＜図 12　フロントランナーの発表の様子＞

これらを通して、令和 7 年度に行ったアンケートでは「自分で国や社会を変えられると思いますか。」について、約 30%の生徒が「はい」と回答し、増加が見られた。これは、企業や公民館など、生徒が社会とつながりながら探究していることを自覚できたことで、自分の提案が国や社会に影響を与えることができる、現代的な諸課題に対して自分が何か行動していくことは決して無意味ではないことを感じる生徒が増加したと考えられる。

現代的な諸課題をより自分事化し、それを解決するために社会とつながり、各教科等の学びも活用しながら探究を進める姿が見られた。その中で、生徒が身に付けた資質・能力は、社会に出たときに立ちはだかるであろう様々な現代的な諸課題に対して、自ら解決策を考え、実行し、振り返りながら、よりよい社会や幸福な人生に向けて歩みを進めていく力となると考えている。

課題として、未来創造 Day③において、半日の時間を有意義に活用できない生徒がいたことがあげられる。企画書の制作に時間がかかり、十分に計画を練れなかったことや過去を知る小単元①の探究が不十分であり、解決したい現代的な諸課題が明確になっていなかったことがあげれられる。「何が問題なのか」を明確にしていくことで、提案内容もより洗練されてくるのではないかと考える。企画書の作成を早い段階から進められるようにしておくことや先行研究、企業の取組について調べたり、実際に話を聞いたり、現地に行ってみたりすることができるようにしていくことが必要だと考える。

4　今後の展望

今年度の探究を継続していくとともに、更に自らの探究をデザインする場を設け、主体的な活動にしていきたい。また、中学校で学んできたことを生かしながら、実現したい未来に向けて中学校卒業後も自ら課題を設定し、情報収集し、それを整理・分析して、まとめていくような探究をし続けていく生徒の育成を目指し、未来創造科を行っていきたい。

そのために、今年度の研究で得た社会とのつながりをより一層強化したり、広げたりすることで、主体的な活動を促すことで、「社会を変えられる」と実感する生徒を増やすことができると考える。

＜参考文献＞

群馬県教育委員会（2019）『はばたく群馬の指導プラン II』.
群馬県教育委員会（2022）『ぐんまの STAEM 教育』.
群馬県教育委員会（2022）『総合的な学習の時間で児童生徒も教師も楽しく探究！』.
文部科学省（2017）『中学校学習指導要領　総則』.
文部科学省（2017）『中学校学習指導要領解説　総合的な学習の時間編』.
文部科学省（2022）『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』.
中野真志・加藤智（2023）『資質・能力時代の総合的な学習の時間　知性と社会性と情動のパースペクティブ』,三恵社.
田村学・齋藤博伸監修、日本生活科・総合的学習教育学会第３２回全国大会・神奈川大会実行委員会編著（2023）『探究的な学びを実現する「生活・総合」の新しい授業づくり』,小学館.
全米科学・工学・医学アカデミー編、秋田喜代美・一柳智紀・坂本篤史監訳（2024）『人はいかに学ぶのかー授業を変える学習科学の新たな挑戦』,北大路書房.